

皮膚科のトリビア

198

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」,そこから転じて「瑣末なこと」となり,今では雑学的知識,豆知識,などを意味する言葉として定着している。

本欄は,小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ,連載しています。ご意見等ございましたら,ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第1回日本フットケア・足病医学会年次学術集会から

令和2年12月4日

血管のメンケベルグ型石灰化

慢性腎臓病(chronic kidney disease:CKD)では冠動脈,脳動脈,末梢動脈に石灰化を生じやすく,血管石灰化の有無は生命予後に関連すると報告されている。血管石灰化は内膜のプラークが石灰化をおこすアテローム硬化型石灰化と,血管の中膜を首座とするメンケベルグ型石灰化に大別される。後者は血管平滑筋細胞が骨芽細胞様細胞に形質転換することにより進行すると考えられている。進行期のCKDや透析患者ではメンケベルグ型石灰化が高頻度にみられ,臨床的に問題となることが多い。

一言コメント

「用語としては初めて聞いたが,イメージできた。何か電解質を補正したりといった予防や,沈着した石灰を融解するような治療があればいいのだが,リスクとなる腎機能障害や糖尿病の管理しか,いまのところはなさそうだ。」

●第1回日本フットケア・足病医学会年次学術集会から

令和2年12月4日

下肢浮腫の患者はDダイマーを測定しておく

下肢浮腫の総説。浮腫は間質液が過度に増加した状態と定義される。間質液は血液循環で90%,リンパ循環で10%回収されるが,これを規定するのが毛細管圧,膠質浸透圧,血管透過性のバランスで

ある。頻度の高い下肢リンパ浮腫の診断は,手術歴等がない場合は容易ではなく,多くは除外診断に頼らざるをえない。とくに深部静脈血栓症は否定する必要がある,Dダイマーの測定は必須といってよい。

一言コメント

「わずかな外傷から,流れるような多量の滲出を生じる例を経験するが,どうすればいいのか判断に迷っている。心血管系の評価や薬剤との関連を内科主治医にお願いすることが多いのだが,皮膚科としてどうするのがベストな対応か,答えをもっていない。今後の検討課題だと思っている。」

●第1回日本フットケア・足病医学会年次学術集会から

令和2年12月4日

慢性下肢浮腫に圧迫療法は必要か

臨床の現場で多く経験する下肢浮腫ではあるが,下肢浮腫の患者にリハビリテーションが必要かどうかを検討した報告は非常に限られている。下肢の慢性浮腫症例84名を対象とした単一施設のランダム化比較試験では,対象者を圧迫療法群と予防教育のみの対照群の2群に分けて蜂窩織炎の発生頻度を比較した。圧迫療法群では7名(3%),対照群では6名(14%)で蜂窩織炎のために入院治療を要し,慢性下肢浮腫患者に対する圧迫療法が必要だと論じられている。

一言コメント

「なんとかしないといけないと思うが,皮膚科医がどの程度関与すればよいのか,むずかしい問題である。」

●第44回日本小児皮膚科学会学術大会から 令和3年1月9日

小児のアザ治療, 1歳以下は無麻酔でOK

小児のレーザー治療の話。乳幼児の精神発達の状態から、2歳ごろまでに、危険な状況における恐怖など、大人と同じ情動が現れるので、2歳までに早期の治療を行うとよい。具体的には1歳以下では小さな異所性蒙古斑(4 cm²以下)や血管腫に対する色素レーザー治療は無麻酔で治療可能。広範囲の病変でも施術を分割することにより局所麻酔での治療も可能。

一方で、アメリカ食品医薬品局から、3歳以下の乳幼児に対して繰り返し全身麻酔を使用すると脳にダメージを与えうるとの注意喚起がなされている。

一言コメント

「異所性蒙古斑、乳児血管腫は生後2~6カ月が治療時期としてもっともふさわしいとのこと。これまでの紹介のタイミングでは遅かったようだ。」

●第44回日本小児皮膚科学会学術大会から 令和3年1月9日

ダウン症候群の成人期医療は多くの課題がある

ダウン症候群の成人期医療については、誰が主治医になるかも含めて多くの課題がある。1) 若年成人に生じることがある急速な退行症状、適応障害の病態解明と治療、予防の開発、2) 40歳までに脳組織にβアミロイドが沈着し、早期老化が進むことと21番染色体遺伝子が関連するかどうかの解明と、治療、予防の開発、3) 出血性脳梗塞など、死因に関する検討などが大きな課題である。

一言コメント

「皮膚科ではなかなか寄り添えないが、療育から福祉と医療への引き継ぎがむずかしそうだという印象はもっている。社会全体での対応が必要か。」

●第44回日本小児皮膚科学会学術大会から 令和3年1月9日

ダウン症候群に多い、稗粒腫様の石灰沈着

ダウン症候群の女児。両上眼瞼と手背、足趾などに7歳ごろから白色の小結節が点在するようになった。病理組織像では真皮浅層に結節状の好塩基性物質の沈着があり、Milia-like idiopathic calcinosis cutisと診断した。

国内では9例の報告があり、そのうち6例がダウン症候群であった。汗管腫を合併することが多く、表皮内汗管の通過障害から汗腺内のカルシウム濃度が上昇し、石灰沈着を生じる可能性がある。

一言コメント

「ダウン症候群では汗管腫を伴うことも多いので、そこに石灰化がおこるのではないだろうか。診断したことはないが、まれではないような気がする。」

●第44回日本小児皮膚科学会学術大会から 令和3年1月9日

川崎病は眼球結膜の毛細血管拡張が特徴的

川崎病は近年発生が増加していて、2018年は小児10万人あたり360人と過去最高値となった。4歳未満の患者が7割を占め、男女とも9~11カ月児がもっとも多く、全年齢を通して男性が女性の1.4倍と多い。

古典的な皮膚症状のほか、急性期には眼球結膜の毛細血管が1本ずつ追えるほど拡張するのが特徴の1つである。

一言コメント

「開業医には来ないようで、数十年みていない。急性期治療に関しては免疫グロブリンに加えて、不応例にはインフリキシマブが使われるようになり、冠動脈病変の発生頻度は以前に比べて少なくなったという。」